

とし、不審庵を臺目とし、各左右を分別して八爐とはなれりけり、又代々の宗匠無量の數寄屋有といへども、此八爐の外に出る事あるべからず能々分別する時は、自在是に遇たるはなし。

〔翁草〕^五當代奇覽と題せるものに、あらゆる雜談有り、十が一爰に拾ふ。

一古老の云、^{○中}珠光紹鷗迄は、皆臺子風爐の茶湯にして、爐と云事はなし、利休始て爐と云事を

仕出せり、^{○中}丸き鐵のどうごを板に切入れしは、珠光紹鷗時代より有しよし、今爐の灰を隅を

あげて丸き形にするは、鐵のどうこの丸き形を表するよし云説あり、其虚實は不知。

〔長間堂記〕一利休一疊屋に圍爐を初はすみ切にせしを、さびしきとて客の方へ入かへけれども、又客三人の下一人より亭主の後三人惡きとて中へ入かへて、扱先の一こまはいらぬ物とて切拾、一疊臺目と云なり。

〔三百箇條〕^{下之上}一數奇屋は四疊はん、一疊はん、貳疊大、此座敷にて自餘のさし圖可有分別事。

怡溪曰、^{○中}右三通の座敷圍爐裏の切様、左勝手、右勝手は常體なれば不及記、其内大切目小切

目とむかしよりいふは、一疊の先に切たるを大切目、大目の先に切たるを小切目といふ、畢竟

一疊はんと一疊はん構と也、四疊はんと四疊はん構大目と大目構とのこと也。

〔茶道望月集〕^{三十五}一此座敷^{○半}に爐を切る時、むかふて表の方に、切を出爐と云、又勝手の方、角

に切たるを入爐と云、凡て本式は出爐なり、則一疊半切と云、又向ふ切とも云也、人によりて此切様をツ、切と云人有惡し、ツ、切とは、奥に云處の分ノ物也。

〔茶道望月集〕^{三十七}一當時突切爐と云物は、前に云一疊半座敷の切様をさして云と見へたり、古法の突切爐と云は左にあらず、たとへば長三疊敷の座敷ならば、勝手口より踏込疊を亭主疊として、其むかふ中の疊にむかふて、左の方の手先きに爐を切入タルを云也、然ればむかふて左の方の壁ざわへ爐を付て切たる物也、是を突切と云也、尤一疊半の座敷にても、向ふへ突付て切た